天国を望み見て生きる人生

Ⅱコリント4章16節～5章10節
2021年11月07日
松田 基子 師

今日は、11月第一聖日で、 多くの教会では、先に召された方々を覚え、共にイエス・キリストの十字架の贖いによって救われた恵みに感謝し、天上の礼拝に心を合わせ、永遠の命への希望を新たにする日です。

神様は私達人間に命と使命を与えて、世に送り出して下さいましたが、地上に生を受けた人間は、全て例外なく、必ず死を迎えます。
近年百歳を超える方は、珍しくありません。 今年の敬老の日に、百歳以上の方は八万六千五百十人おられたそうです。 しかし、それらの方々にも、死は必ずやってきます。 他人事ではありません。 誰も自分の死を死んで行かなければなりません。 多くの人は、必ず死を迎えなければならないにも拘わらず、死について考える事を嫌っています。 それは、死に対する明確な解決を持っていないからではないでしょうか。

そのような中で、聖書は、死の意味と勝利を示しています。 ローマ書5章12節に、

「**一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。 すべての人が罪を犯したからです。**」

とあり、6章23節には、

「**罪が支払う報酬は死です。**」

とあります。 ここで罪とは、自分の命の与え主である、神様に背いて、自己中心に生きることで、正しく生きられない性質と、その結果を意味しています。 罪を犯さない人間は一人もいません。そのために、人は皆、死ななければならないのですが、それは、肉体の死で終わらず、永遠の滅びが待っているのです。 その事を一番悲しみ、苦しまれたのは、人間の命の与え主である、創造主なる神様です。 神様はそのような人類を、何としても救いたいと思われ、神の御子を人の子として誕生させられました、それがイエス様です。

イエス様は父なる神様と同じ心で人類を愛され、その身に全人類の罪を引き受け、身代わりの十字架に架かって人類の罪を償い、神の子の尊い価で、人類の罪の負債を贖って下さいました。 神様はそこに、人類の罪を精算されました。 そして、人類に天国の門を開き、イエス・キリストを通して迎え入れて下さるその証明に、イエス様を、十字架の死から3日目に、復活させられました。 ここに、イエス・キリストこそ人類の真の救い主である事が証明されました。
使徒パウロは、この福音を人々に伝えるために、一世紀の地中海世界に、伝道して歩きました。しかし、その宣教活動は、ユダヤ教からの迫害や、その土地その土地の宗教からの迫害、旅の困難、様々な苦難を負いながらの宣教活動でした。 パウロはそれにも拘わらず、キリストの福音の素晴らしさを、生き生きと語って歩きました。

今朝の聖書箇所は、パウロがコリント教会の人々に対して、

『イエス・キリストに結ばれた者に与えられている、**死の彼方の絶大な恵み**』

を語っている箇所です。 今朝は、キリスト**信仰の確かさ、天国への希望**に心を向けて参りましょう。

さて、パウロの宣教活動と言うのは、コリントⅡ6章5節に記されていますように、

「**鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓**」

などの苦難と絶望、行き詰まりの連続でした。
人の目から見るならば、

『何と憐れな、悲惨な人生なのだろうか』

と思うでしょう。 ところがパウロは、そのような苦難を、

『イエス・キリストを信じ、キリストを宣べ伝えた事によって受ける苦しみであることから、かえって、そのような所に、キリストの力が輝き出る。』

と受け止めていました。

コリントⅡ4章8節に、

「**わたしたちは、四方から苦しめられても行き**

詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。 わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています。 イエスの命がこの身体に現れるために。」

と言っています。 しかし、それは、

『現実の肉体が、ロボットのように強く、疲れる事が無い』

と言っているのではありません。

パウロは、現実もまた、しっかりと見ていました。コリントⅡ４章16節に、

「たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」

と言っています。 パウロはここで、自分自身を外なる人と、内なる人の二面から語っています。パウロにとって、

外なる人--とは、

『現実に困難と闘って衰えていく肉体、歳を重ねる毎に、老化して行く肉体』

を意味しました。 パウロのような、激しい人生は、肉体をどれ程酷使したか分かりません。 その分、外なる人は、衰えを感じないではいられなかったでしょう。 それに反して、

内なる人--と言うのは、

『イエス・キリストを信じて、霊の命である、魂が成長し始めることです。』

イエス・キリストを心の内に迎え、キリストに養われ、成長して行く、霊の命は、外なる人である肉体の衰えに反比例して、愈々(いよいよ)**キリストの豊かさが、身について行く**のでした。 その魂は、キリストとの霊の交わりによって、日々強靭にされて行きます。

その結果、見えてくるものがあるのです。

4章17節に、

「わたしたちの一時の軽い艱難(かんなん)は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。」

と言っています。 この世の目線で見るならば、パウロが受けている福音宣教のための迫害、困難、苦労は、とても耐え難い、潰れてしまう程重い艱難でした。 この世の目には、その重さだけしか見えません。 しかし、パウロには、その重さを比較出来る、別の世界が見えていました。 それは、同じ艱難との比較ではなくて、その艱難を償って余りある、

『途方もなく、破格のもの』

が見えていたのです。

その世界が見えるパウロには、人の身に耐えられない、

『投げ出してしまいたい』

と見える艱難が、軽いものに見えたのです。

そこでパウロは、4章18節に、

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。 見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

と言っています。 肉の目には見えないけれども、パウロの信仰の目には見える世界、それは

『永遠を支配しておられる神様の世界、イエス・キリストが死から甦って、神の右の座について、生きて働いておられる世界』

でした。

パウロはやがて、自分もその世界に引き上げられる事を確信していました。 その事について5章1節から、述べています。

「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。」

と言っています。 遊牧の世界を、身近に知らない私達にとって、幕屋とは馴染みのない物ですが、当時、中近東を始め、地中海世界では、牧羊が行われていました。 牧羊者達は、沢山の羊を養い育てる為に、羊を連れて牧草地を移動しました。 そのため、牧羊者達は、羊の移動に合わせて、住まいとなる幕屋、即ちテントを建てたり、畳んだりして生活をしました。 その幕屋は、太陽の光や、風雨に晒されて、年月と共に傷んで朽ちて行きます。 人間の肉体も、幕屋が朽ちて、無くなってしまう様に、肉体が機能しない死を迎える時が来るのです。

しかし、パウロは、

『それで自分は終わりではない。 神様は

天に永遠の住みかである建物を備えて
いてくださる。』
と言っています。 パウロの確信はこうです。
パウロはコリントⅠ15章20節で、
「**実際、キリストは死者の中から復活し、眠り
についた人たちの初穂となられました。**」
と言っています。 その意味は、初穂と言うのは
その後にも、同じ状態が続くと言う意味です。

イエス・キリストを死に打ち勝たせて、復活させられた、創造主なる神様は、イエス・キリストを信じ、キリストに繋がる人々を、キリストを復活させられたように、復活させて下さるとの約束なのです。 それは今までの朽ちてしまう肉体ではなくて、15章44節に記されていますように、
「**自然の命の体が蒔かれて、
霊の体が復活する**」
と言う、永遠の世界に生きる霊の身体です。
パウロは自然の体を幕屋に喩えた(たとえた)時、朽ちる事のない霊の体を、
『神によって与えられる建物、
天にある永遠の住みか』
と表現しました。

神様がそのように備えてくださっている事を知ったパウロは、コリントⅡ5章2節に、
「**わたしたちは、天から与えられる住みかを
上に着たいと切に願って、この地上の
幕屋にあって苦しみもだえています。**」
と言っています。 幕屋や天の住まいを着ると言う説明で、分かり難いのですが、パウロが言いたいことは、死後は次元の違った世界に生きることができるように創り変えられると言っているのです。

私達は、
『肉体を宿としている人生途上で、襲って来る
様々な試練に、この重荷が一刻も早く取り去
られるように。」
と悲壮な思いに陥るものです。 パウロも、
5章4節で、
「**この幕屋に住むわたしたちは
重荷を負ってうめいておりますが、**」
と言っています。
「**うめいている**」
と言うのですから、苦しみに必死に耐えて、
『投げ出してしまいたい。』
と言う姿を想像します。 ところが、理由はちょっと違っていました。 5章4節に、
「**それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいから
ではありません。 死ぬ筈のものが命に飲み
込まれてしまうために、天から与えられる住み
かを上に着たいからです。**」
と言っています。 問題は肉体を宿としてうめいているパウロのうめきは、
『苦しい・・・もう嫌だ、どうにかしてくれ。』
と言う、うめきではなかったのです。 このうめきは、妊婦が新しい命の誕生のために、うめく、うめきに等しいものでした。 地上の苦しみの彼方には、天にある永遠の住みか、つまり、永遠の命を宿とする、霊の身体に造り変える事がはっきりと見えていました。

唯パウロは、この時、イエス様が、再びこの世に来て下さる、再臨の時が近いと考えていましたので、彼の願いとしては、肉体の死によって魂が裸にされる事がなく、つまり、キリストの再臨によって死ぬ事がなく、霊の身体に造り変えられたいと、願ったのでした。 5章4節後半の、
「**死ぬはずのものが、命に飲み込まれて
しまうために、天から与えられる住みかを
上に着たいからです。**」
とはそのことです。
パウロは、そのような事は決して自分の力で出来るものではなく、5章5節に、
「**わたしたちを、このようになるのに
ふさわしい者としてくださったのは、
神です。 神は、その保証として、
“霊”を与えてくださったのです。**」
と言っています。

イエス・キリストを神の子、救い主と信じることが出来るのは、決して人間の知恵や理解力によるものではありません。 心を開いて信じる時、心の内に聖霊が働いて下さり、確信が与えられます。 そして、聖霊はエフェソ書1章14節に、記されている通り、
「**この聖霊は、わたしたちが御国を受け**

継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。」

と、天の住まいに住むことが出来ると言う事を約束しています。 パウロはこの聖霊の証印を受けて、コリントⅡ５章6節に、

「それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。」

と言っています。

肉体を宿としている世界は、時間と場所に制限されている世界です。 わたしたちはそこに神様から、命と使命を与えられて、遣わされていますが、神様がおられる永遠の世界は、時間にも場所にも制限されることのない世界です。 肉体を宿としている間は、イエス・キリストがおられる所とは次元が違います。 そこで、パウロの願いとしては、身体を離れて、イエス・キリストの許に住むことを願っているのですが、彼は、見えるものではなく、見えないものに目を注いでいる事によって、聖霊によって何時もイエス・キリストとの交わりを持っていました。

そこで彼の生き方は、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、直すら、

『イエス・キリストに喜ばれる者でありたい』

と願いました。 その理由として、5章10節に、

「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていた時に、行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。」

と言っています。

この言葉を聞きますと、私達は皆

『どうしよう』

と不安になってきます。 私達の肉体を宿とした人生は、 人には言えないような、隠した罪で一杯です。 裁かれるなら、私達はそこに立つ事が出来ません。 しかし、ここで言っている事は、そう言う事ではないのです。 エフェソ書1章7節には、

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」

と宣言されています。 しかし、だからと言って、

『罪はもう赦されたのだから、何をしてもよい』

と言うのではありません。

『赦されたことと、どんな罪を犯したかは、別のことです。』

イエス様は私達が犯した全ての罪をご存知です。その上で、赦して下さっています。 ご自身の十字架の贖いで、赦して下さいましたが、やがての日にはイエス様の前で、人生の総括は、しなければならないと言うことです。

私達は常に、自分の人生の行き着く先を、はっきりと見定めて、イエス・キリストによって与えられる恵みの大きさ、絶大さを、見誤る事の無い人生を送りたいものです。

先に召された、御国に移された聖徒達のように、見える物にではなく、見えない物に目を注いで、天国を望み見て、この世の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

今日は、ご遺族の皆様をお招きして、共に召天者記念礼拝を守らせて下さり、有難うございました。

先に召された方々の信仰に倣い、私達も永遠の御国で、霊の体に化せられて、主を誉め讃える日を望み見つつ、地上の旅路を雄々しく歩み抜かせて下さい。 ご遺族の皆様を豊かに祝福して下さい。

尊い救い主イエス・キリストの聖名によってお祈りを致します。

アーメン。